

The social welfare in OSAKA



大阪の 社会福祉

2023年2月

813



社会福祉
法人

大阪市社会福祉協議会

<https://www.osaka-sishakyo.jp>



▲会場・オンライン計265人が参加し、地域共生社会の実現に向けた実践を共有

市社協



大阪が誇る歴史・実践を
これからの力に

—近畿地域福祉学会—

「第34回 近畿地域福祉学会
大阪大会」が令和4年12月17
日、大阪市社会福祉研修・情報
センターで開催されました。
本誌前号でも「速報版」とし

てお伝えしましたが、今号で
は、午後の全体プログラム（基
調講演・シンポジウム）の詳細に
ついて2・3面に掲載します。
（2面につづく）

HB

2020パラリン
ピックで一躍注目を
浴びたボッチャ。誰

にでも簡単にできそうで、障
がい者と健常者の交流にも、
小学生と高齢者のふれあいに
もピッタリで、ブームはまだ
続いている▼そんな競技なら
僕たちもやってみたいと、ほ
ぼ寝たきりの重度の障がい児
たちのために、オンライン
ボッチャというものが登場し
た▼私がのぞいたのは月に一
度の練習会。青森から鹿児島
まで10人ほどの寝たきりの障
がい児と支援する若い学生た
ちが参加▼指でキーボードを
押せる人は少数派で、口にく
わえたスティックでキーボ
ードを叩く人、中にはストロ
ードを吹きかけてコンピュー
タを操作する人も。そうして
指示されたボールの高さ、転
がす角度などを学生ボラン
ティアが現場でマシンを操
作、投球をする▼寝たきり
で、たくさんの人に支えられ
ながらだけれど、子どもらし
く、仲間と遊ぶ体験ができる
▼操作マシンが全国に2台し
かないこと、支援ボランティア
の数も限られているなどの
課題はあるが、昨年10月には
第1回の全国大会も開かれた
▼スポーツフォアオールはこ
こまで進んでいる。
（石）



大会レポート

「大阪発！これからの地域共生社会を展望する」 地域福祉の源流に学び未来を紡ぐ 第34回 近畿地域福祉学会 大阪大会

近畿地域福祉学会の年次大会は、近畿6府県の持ち回りで毎年1回開催しています。大阪府では、大阪府・堺市・大阪市の3社協が順に実行委員会事務局を担うため、本会が事務局となるのは実に18年ぶりとなります。オンライン開催が続くなか、久々の参加型による開催で熱気あふれる大会となりました。

大阪の社会福祉の歴史・源流に学ぶ

午後からの全体プログラムでは、はじめに会場の大阪市社会福祉研修・情報センター初代所長でもある本会右田紀久理事事

（大阪府立大学名誉教授）から、大会へのお祝いメッセージをいただいた後、本会の永岡正己会長（日本福祉大学名誉教授）が「大阪の社会福祉の歴史・源流に学ぶポストコロナの地域福祉活動」と題して、基調講演をおこ

ないました。

「大阪の社会福祉実践は、全国に先駆けたものが多数あり、市民生活に根ざした運動により発展してきました。それらは、慈善事業実践の組織化、市民・企業からの寄附に基づく施設の創設、行政と民間がともに地域に入り込んでの実践、公立のセツ



▲本会の永岡正己会長による基調講演

大会概要

- 開催日時** 令和4年12月17日(土) 午前9時30分～午後4時
(午前：自由研究発表・実践活動報告／午後：全体プログラム)
- 場所** 大阪市社会福祉研修・情報センター
(午後のみオンライン併用)
- 参加者** 会場・オンライン計265人
(社協職員、研究者、学生、行政職員、社会福祉施設職員、NPO関係者、民生委員・児童委員など)
- 主催** 第34回 近畿地域福祉学会 大阪大会実行委員会
(事務局：大阪市社協)

施設・社協・社会起業3つの実践を共有

続くシンポジウムでは、武庫川女子大学の松端克文教授（大会実行委員長）の進行のもと、中西裕さん、乾繁夫さん、川口加奈さんがそれぞれの実践について報告。コメンテーターの桃山学院大学の小野達也教授（近畿地域福祉学会代表幹事）を交えて大会テーマに沿って議論を深めました。

ルメント施設である市民館など、多様な立場の人が一緒に becoming につくりあげてきた歴史があります。また、貧困問題や地域の福祉課題について『調査』を実施し、事業を築いてきたことも大阪の伝統と言えます。こうした背景から、施設と地域がネットワークを有し、実践と調査と研究が連なって展開してきたことは改めて認識すべき大阪の文化風土であります」とのべ、コロナ禍で激変した直近3年だけでなく、2000年以降の格差の広がりにも目を向け、これからを考える必要があると締めくくりました。



▲オンラインによる過去2大会を経て、3年ぶりの会場参集による大会が実現

「地域における社会福祉法人の役割」

四恩学園はセツルメント運動から西成区で発足し、住吉区・天王寺区で施設運営。0歳から100歳までの地域創発の結び目として、ごちゃまぜ食堂、大学生との協働など新たな活動を展開中。こどもの虐待は社会の問題であり、制度充実も地域での予防も両方必要である。前向きに楽しく活動していくとともに、本当にしんどい人に届くような支援を考えたい。

社会福祉法人四恩学園 理事長
中西 裕 さん

▶ まずはニーズありき、制度は後からついてくる

「大阪市から発信する地域福祉活動のこれから」

西成区はいりん地域を抱え、生活保護率が全国一位であるが、区民のつながりは強く、住民同志の支え合いの意識を高めあってきた。区社協としても支援団体などと連携・協働し、労働者への支援や話し合いを重ねてきた。また、住民主体で小地域福祉活動や地域福祉アクションプランを推進し、活動を通じて、住民同士のつながりをつくってきた。コロナ禍の今、改めてボランティアのやる気や楽しみが生まれるようはたらきかけることも大事。

元 大阪市社会福祉協議会 会長
乾 繁夫 さん

▶ 「福祉によるまちづくり」をスローガンに実践

「ホームレス状態を生み出さない日本へ」

14歳の時に西成区でホームレス問題と出会い、大学生でHomedoorを立上げ。路上生活から脱出したいと思った時の選択肢として、レンタサイクルによる仕事づくり（HUBchari）、夜回り活動、シェルター、食堂の開設などを展開。コロナ禍で特に若年層の相談が増加。また、DV被害者の女性など、相談に来る人が多様化しているなかで、調査研究しながら新たな取り組みも検討したい。

認定NPO法人Homedoor 理事長
川口 加奈 さん

▶ 誰もが何度でもやり直せる社会へ

参加者の声

（基調講演・シンポジウムについて）

- セツルメントが地域福祉の源流であり、いまこそ、その精神に立ち返ることが必要であると感じました。
- 大阪の実践について、サービス中心主義ではない、理念・ビジョンを持った話に感銘を受けました。
- “ニーズがあって実践活動がある”という言葉のとおり、3人の報告は社会の課題を見据えての取り組みだと感じました。
- 中西さんの「こどもを中心に」は、自分自身もいつも感じていることだったので印象に残りました。
- 乾さんが発言された「福祉によるまちづくり」の言葉の意味を深く理解できました。
- 川口さんの話を興味深く聞かせてもらい、相談が若い人が多いことやホームレスの背景などで初めて知ることが多く、少なからず偏見をもっていたのだと気づきになりました。

課題と向き合いながら楽しく、前向きに

先人からの実践を継承し、発展させてきた中西さん。住民主体の地域の福祉活動を推進してきた乾さん。自らの気づきで新たに団体を立ち上げた川口さん。3人のパネリストに共通していたのは、つながりを大切にしながら活動していること、大会会場の大阪市社会福祉研修・情報センターがある「西成」が実践のルーツでもあることでした。

後半のディスカッションでは、3つの実践から見えてきたポイントとして、厳しい立場にある当事者と真摯に向き合い、新たな方法での解決を模索していくこと。差別や偏見を克服し、ともに生きる地域社会を築くために、学び・交流・発信を重ねていくこと。一方で、制度外の活動だからこそ、活動の楽しさや喜び「こうなれば」というビジョンを描き、ポジティブな視点で実践を続けていくことなどを確認しました。

結びとして、大阪市ボランティア・市民活動センターの上野谷加代子所長（同志社大学名誉教授）は、「大阪の底力を学べた。大阪の実践は今も昔も、したたかに人様の力を借りて、とりあえず目の前の課題を解決しようとするものである。一人ひとりの悩みと向き合うのは大変なこと。支援に関わる人たちはもうちょっと肩の力を抜いて、めざすべき方向性を話し合いながら実践していったらいい」と大会を締めくくりました。

住之江区 「誰かのため」「自分のため」に輝きたい 60歳以上の方集まれ♪ 「ボランティアフェスタで新たな出会い」



住之江区社協は、ボランティア活動をしたいと考えている方たちが出会い、参加・参画のきっかけづくりの場として、12月4日（会場：南港ポートタウン管理センタービル）、21日（会場：すみのえ舞昆ホール）に「ボランティアフェスタ」を開催しました。

2日間3回の開催で、ボランティア活動に興味を持つ105人が参加し、多くの新しい出会いがありました。

♪♪♪
256人への
はじめまして

「ボランティアフェスタ」を企画した背景には、令和3年度に生活支援体制整備事業で実施した「シニア世代の望む活躍と集いの場調査」の結果があります。



▲地域やボランティアグループ、社会福祉施設、支援機関などから約40団体が参加

ます。これは、区内在住の60歳以上の方1万人に対して、活躍の場や暮らしの困りごとなどについてアンケート調査したものです。3343人から回答があったうち、「自分の資格や経験を活かしてボランティア活動をしたい」と思っているか」との問いに「活動したい」と回答し、自身の連絡先を記入した人が256人いたことが大きなきっかけとなりました。

区社協では、この256人全員に電話をかけ、思いやできることを聞き取りました。中には「何かやりたけれど、何ができるのか、どんな活動があるのかわからない」との声もあったことから、調査の実行委員会（第1層協議体）で検討を重ね、多様な団体の参画の



▲ボランティア登録時は関心のある分野や得意なことを聞かせていただきます

♪♪♪
やりたいことが
見つかった！

もと、さまざまな活動を紹介するボランティアフェスタの開催が決まりました。

ボランティアフェスタ当日は、アンケート調査に回答した方のほか、広報紙などを見て来場した方までにぎわいました。梅花女子大学の綾部貴子准教授からは、ボランティア活動が本人にもたらす効果や意義について

での講演、少し前に活動を始めた先輩ボランティアからは、活動していてよかったことや、やりがいなどについての報告があり、これから活動を始める方へエールが送られました。

交流タイムでは、地域やボランティアグループ、福祉施設などの各ブースのなかから気になるところを自由に廻り、活動内容や魅力を直接聞きました。中には、その場で区ボランティア・市民活動センターにボランティア登録したり、興味のある活動をしているボランティアグループへの見学を決めたりと、実際に活動を始める一歩を踏み出した方もいました。

♪♪♪
シニア世代の活躍で
地域も元気に

ボランティア活動者や地域福祉活動の担い手をどのように増やしていくのかは、各区共通の課題です。住之江区では、調査からボランティアフェスタの開催を経て、「何かやってみたい」という思いを持った方と丁寧につながり、実際の活躍の場に結びつけました。

区社協・第1層生活支援コーディネーターの谷口文香さんは「256人の方、一人ひとりとお話したことで、活動したいけれど入口が分からず活動していない現状」を知りました。生



▲各ブースでは、活動者から活動内容や魅力などを直接聞く機会に♪

の声を聞くことで、互いに心が通い、手応えを感じ、ボランティアフェスタへの招待につながりました。今後もシニア世代の生の声からニーズをキャッチし、生活圏域や区域で実現していきたいと思っています。地域支援担当の戸川七海さんは「何から始めて良いか分からなかった方が、趣味を活かして『空いた時間で気楽にやってみる』や『ボランティア活動の見学に行ってみる』と言ってもいい」と言ってもらえたときはとても嬉しかったです。これからも一人ひとりの思いを大事に、活動を応援していきます」と今後の抱負を話しました。



◀当日の様子はこちらでも紹介しています
(住之江区社協Facebook)

「趣味を生かして楽しく生きがいがいづくり、つながりづくり」 コミュニティ農園「結びファーム」における 栽培ボランティア養成講座



生野区社協では、平成30年度から、定年退職後の男性を中心に、野菜の栽培や農作業を通じた生きがいづくりや交流を目的とする「栽培ボランティア養成講座」を開催しています。講座受講後は、「栽培ボランティア」として活動し、自分たちで育てた野菜などの収穫物を地域の施設や団体にお届けし、地域とつながるきっかけとなっています。

今年度で5期生を募集することになった養成講座。講座に参加したきっかけはさまざまですが、「農園」を通して人や地域とつながり、ボランティア活動に関わる入口となっています。



育てた野菜を届け、
地域とつながる
きっかけに

今年度は、令和4年9月から令和5年2月まで計12回の連続講座となっており、この日は8回目でした。

12月22日、住宅街に挟まれたコミュニティ農園「結びファーム」に集まったのは、今年度の講座受講生と講座を卒業した栽培ボランティアの方々です。



▲住宅街のなかにひっそりたたずむ「結びファーム」

1期生の講座時から講師を務める株式会社マイファームの水上真吾さんに収穫の仕方を教わりながら、さつまいも、にんじん、大根、じゃがいも、春菊などを収穫しました。「けっこう力いるからええ運動になるね」「できるだけ土は畑に残した方がええよな」「春菊見た目はいろいろやけど、ええ匂いしてるね」と声をかけあいながら手際よく、あっという間に仕分けまで終了。そのまま全員で収穫したての野菜をすべてもって、区社協が紹介した地域のこどもの居場所に訪問し、こどもたちに手渡しました。



畑でコミュニティ
づくりを

「なんかおもしろい形してる!」といったこどもたちの反応を直接見ることができ「喜んでもらえて嬉しかった」「せっかくならもっと大きな野菜育てたいな」と満足げな様子の皆さん。そのまま畑に戻り、講座を続けました。最後は、椅子に座り、和気あいあいとした雰囲気なか、先生からのレクチャーで締めくくりました。

当初は、区社協の屋上で活動していましたが、取組みを聞いた当時の区長から、大阪市が管理する土地（空地）を活用できないかという話があり、畑をつくり、野菜を育てることを通して地域の人々が交流し合う「コミュニティ農園」が誕生しました。

区画ごとに地域や団体、事業



▲「掘っても掘っても出てくるで」

所、ボランティアグループなどが企画し、それぞれの区画を利用し、さまざまな野菜を育てています。水やりなど、毎日のお世話が必要となってくるので、栽培ボランティアも活躍しながら、助け合って育てています。

栽培ボランティアとして活動している森田一彦さんは、「定年退職後、何か自分から動かなければと思い、畑の活動を見かけたことをきっかけに2期生として参加しました。今では、野菜が気になって毎朝農園に行くことが日課になっています」と話します。

区社協・第1層生活支援コーディネーターの西本恵歌さんは「いろいろな考えやバックグラウンドを持った人たちが利用しているコミュニティ農園は地域のミニ版のようなものだと思います。利用しているなかで



▲育てた野菜をこどもたちに届けました

さまざまな課題も出てきますが、結びファームを利用して人たちが主役となっており、お互い理解し合い、協力し合うなかでコミュニティが生まれていく場所にしていきたいです。また、手先が器用な方など、それぞれもっている特技を活かしながら、役割をもって参加し、結びファームをよりよいものにしていければと思います」と今後の抱負を語りました。



▲たくさん採れました



モルックが世代をつなぐ ―脳と身体を使って運動しよう―



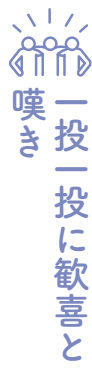
雲一つない晴天に恵まれた、12月10日。此花区の正蓮寺川公園に、就学前のこどもから80歳を超える方々まで約50人が集まり、此花区社協主催のモルック体験会を楽しみました。



モルックってなに？

モルックはフィンランド発祥で、木の棒（モルック）を投げて、スキットルと呼ばれるピンを倒して点数を競うスポーツ。

一見ボウリングに似ていますが、1本だけ倒れた場合はピンに書かれた数字を、2本以上の場合は倒れた本数を計上し、50点ピッタリをめざします。50点を越えると25点に戻ってしまうため、頭で計算しながら戦略を立てる、脳も身体も使うスポーツです。



一投一投に歓喜と嘆き

まずは会場近くの此花区民一休ホールで、日本モルック協会の講師が、基本ルールを説明。その後、年齢層を多様に組み合わせた約5人ずつ10組のグループで公園に移動しました。道中、高齢の女性が「一緒のグループやな、がんばらな」と男の子に声をかけると「説明聞いて



▲12本のピン（スキットル）を並べ、3.5m離れて木の棒（モルック）を投げます。ピンは倒れた位置で置き直すので、少しずつ遠くに分散します

たら簡単そうや！」と余裕の表情。初めて会った人同士、和やかな雰囲気の中、30分のゲーム（約5人のグループ内での個人戦）を開始しました。

当たれば「おー！」と歓声と拍手が湧き起こり、一本も倒せず「あーあかん！」との声も。ねらった点数が取れると、こども連れのお父さんも思わずガッツポーズ。

なかには、年配ながらもひときわ滑らかなフォームで次々に点数を重ねていく方も。話を聞くと「普段からやってるから負けられへんと思うて」とのこ



会話しながら ほどよく運動

と。グループ内で見事一番に50点に達していました。

「あと何点取ったら50点になる？」49点になったら、あと1点ねらうのが実は難しい。点数を計算しながら、自ずと参加者同士の会話も弾みます。また、投げるたびに他の参加者が拾って、ピンを立てて、スコアを付けて…と順に動き続けるので適度な運動になります。

ピンは、倒れた場所で置き直すため、時間が経過することにな



介護予防や交流の 促進ツールに

この取組みのきっかけは、西島地域で定期的にモルックをしている方がいるという情報から、区社協職員が見学・取材したこと。モルックは、高齢者の介護予防・社会参加をはじめ、こどもたちも含め、障がいの有無を問わずに住民同士が交流するツールになるのではと、区社協で小規模な体験会を実施。その手応えから、今回の体験会を企画し、区内の小中学校にも協力を得て周知したところ、



▲個人戦だけど、互いの一投を見守り、称え合いながらゲームは進みます

あつという間に定員の50人に達しました。
体験会をふりかえって、区社協・第1層生活支援コーディネーターの久保奈津未さんは「参加者からは『自分たちの地域でもあったらいいね』という嬉しいお声を多数いただき立ち上げに協力していただく了承も得て、新しい活動の場が生まれようとしています。今回できたつながりから、新たなつながりができるように、モルックの貸し出しや各地域での立上げに向けたサポートをしていきたいと思っています。将来は此花区地域別モルック大会もできたらいいなと考えています」と話しました。



▲最後には集合写真。このご縁から新たなつながりが生まれますように

セルフネグレクトの方をどう支援していくか？ 「支援の当たり前」を捉え直す



ゴミ屋敷状態の 人々への関わり について考える

福島区社協は12月9日、日頃から地域の見守り活動をしている地域福祉コーディネーターを対象に「ゴミ屋敷の実態とその背景、支援方法」をテーマに研修会を実施しました。

いわゆるゴミ屋敷状態の人に
関わっていたり、関わり方が分
からないという声が多く聞かれ
るようになり、セルフネグレク
ト（※）状態の人や世帯を住民
に近い地域福祉コーディネー
ターという立場から支援するた
めに、「できること、すべきこと
は何か」などを考えるために区
社協見守り相談室の長谷川安
伸さんが企画。兵庫県立大学環
境人間学部の竹端寛准教授に
講師を依頼し、地域福祉コー
ディネーター10人、区役所職員
1人、区社協職員7人の計18人
が参加しました。

モヤモヤを 出し合って整理

研修会で竹端准教授は「『ゴミ屋敷』と私たち 支援者の

多職種協働で 継続的に

「ゴミ屋敷状態の人は、さま

『当たり前』を捉え直す」というタイトルで資料を共有しながらリモートで講演。ゴミ屋敷が生まれてしまう背景を客観的、論理的に分析し、「本人には本人なりのゴミを溜めるまでの物語がある。その物語を動かすためには、こちらのアプローチを変えていく必要がある。正解は多様で、ゴミを捨てただけでは解決できない」などと解説しました。

講演の中盤からは参加者から、モヤモヤしていることなどを話してもらい、整理していくことになりました。「足の踏み場もない状態だが、本人に困った感がない」「明るく、人付き合いもいいのに片付けができない人がいる」「知的障がい者でダウン症の一人暮らしの男性への支援について、どうしたらいいか」など、日頃直面しているケースが報告され、竹端准教授が質問したり、アドバイスしたりしながら今後についてディスカッションしました。



▲画面を見ながら熱心に話を聞く参加者（右上：竹端准教授、右下：長谷川さん）

さまざまな苦しいことが重なるなかでトラウマを抱えている人もいます。支援するうちに皆さんが摩耗してしまうこともあるので、多職種協働で考えることができるチーム形成が必要です。今日みたいにみんなで『こうじゃないか』という仮説を出し合いながら考えていく集まりを継続的に開く必要があると思います」と竹端准教授。

長谷川さんも「ゴミ屋敷問題は一朝一夕に解決できるものではないと感じています。引き続きいろいろな機関と連携をとっていききたいです」と締めくくりました。

風をよむ 異次元の少子化対策

大阪公立大学大学院 生活科学研究科 教授 所道彦

「異次元の少子化対策」という言葉がメディアを賑わしている。少子化の現状を考えると、前例のない取り組みが必要という点は間違っていないが、政策によって人の行動をコントロールすることは難しい。たとえば、金融緩和や減税だけでは、個人消費を増やすことはできない。将来に不安があれば、また、欲しいものがなければ、消費に回ることにはない。結婚や出産を少子化対策でコントロールすることは難しく、また、人口の構造を転換するには時間がかかる。

それでも、子どもの貧困、特にひとり親世帯の貧困問題、世代間の格差是正、ワークライフバランス確保のための取り組みなどは実施されなければならない。「異次元の対策」が求められているのは、こういった分野であり、「少子化対策」の枠組みの中だけで議論しないことが重要である。

対策をめぐっては、財源確保が大きな議論となっている。必要な総額が確保されればよいのではなく、誰がどの程度負担するのかについて議論が必要である。たとえば、児童手当には、「支援」だけではなく、子育てしている世帯とそれ以外の世帯との経済的負担の格差の是正という役割もあり、海外では少子化の状況に関係なく実施されている政策である。「給付」だけでなく、「負担」とセットで、制度設計されなければならない。

また、子育て支援策は、「労働」も含めた諸政策のパッケージである。「保育か児童手当か」「現金給付かサービス利用負担軽減か」といった二分法的な議論は避けなければならない。

政策を提案する側には、国民にその内容を説明するための能力が求められる。子育て支援を充実させることが、社会全体にメリットがあることを説明することが重要と言える。

笑って合点!

啓発講演会

成年後見制度・市民後見人活動

成年後見制度ができて22年がたちました。

でも「成年後見制度って聞いたことはあるけど、詳しくは知らないなあ」ではありませんか。

- 成年後見ってどんな人が使う制度? ● 手続きはどうするの?
- 費用はかかるの? ● 市民後見人ってどんな後見人なの?

そんな疑問に落語とトークで楽しくわかりやすくお答えします。

「笑って合点!」全国で話題の「成年後見落語」にどうぞお越しください。



落語家
桂 ひな太郎 師匠

参加費
無料

令和5年

日時 **3月18日(土) 13:30~15:30** (開場 13:00)

場所 **阿倍野区民センター 小ホール**

阿倍野区阿倍野筋4-19-118

内容 **第1部「成年後見落語」**

〈講師〉落語家 桂 ひな太郎 師匠

第2部「成年後見制度・市民後見人活動」まるわかりトーク

〈出演者〉大阪弁護士会 砂川 辰彦 氏(大阪市市民後見人養成・支援会議委員)

市民後見人 米澤 靖雄 氏

落語家 桂 ひな太郎 師匠

対象 **250名**

市民、地域活動関係者、福祉・医療関係者、市民後見人バンク登録者

〈主催〉大阪市社会福祉協議会 大阪市成年後見支援センター、
大阪市阿倍野区社会福祉協議会、大阪市市民後見人連絡協議会

申込み方法

電話・FAX・Eメール・
Googleフォームにより
お申込みください。



▲Google
フォーム

〈締切〉**3月10日(金)**

- ①「成年後見制度講演会参加希望」
- ②名前 ③所属(勤務先)・団体名
- ④連絡先電話番号

※参加証はお送りしませんので、当日直接お越しください。定員を超えた場合のみご連絡します。

〈申込み・問合せ先〉

大阪市成年後見支援センター

〒557-0024 大阪市西成区出城2-5-20

大阪市社会福祉研修・情報センター3階

FAX (06) 4392-8900

TEL (06) 4392-8282

E-mail yousei@shakyo-osaka.jp

HP <https://osaka-kouken.com>

共同募金とは

赤い羽根共同募金は、戦後間もない昭和22年(1947年)に国民主体の民間運動として始まり、現在は、社会福祉法に基づき、地域の社会福祉課題の解決に取り組む民間団体を支援するしくみとして取り組まれています。

お寄せいただいた寄付金は、ひとり暮らしの高齢者の支援、障がい者の就労支援、車椅子のまま乗れる福祉車両の整備、こども食堂、高齢者と地域の人たちの交流事業(高齢者サロン)、子育て支援、自殺予防の電話相談活動事業などの地域福祉活動に助成しています。また、災害への支援や、コロナ禍のなかで生活に困窮する人や社会的に孤立する人の支援活動への助成にも役立てられています。



令和5年度 赤い羽根共同募金記念バッジデザインを募集

令和5年度共同募金運動期間中に、募金運動に協力した方へのお礼や赤い羽根共同募金をPRするためなどに用いる記念バッジのデザインを、近畿6府県の共同募金会が合同募集します。デザインのきまりなど、詳しくは下記ホームページをご覧ください。

〈応募資格〉近畿6府県(滋賀県・京都府・大阪府・兵庫県・奈良県・和歌山県)内に在住または在勤・在学の方

〈締切〉**4月14日(金) 必着**



▲令和4年度
記念バッジデザイン

令和5年度

公益財団法人中央競馬馬主社会福祉財団助成要望書受付のお知らせ

大阪府共同募金会では、一般社団法人京都馬主協会を通じておこなう標記財団の助成金に係る助成要望書を受け付けます。

一定条件が必要ですので、詳しくは下記ホームページをご覧ください。

〈受付期間〉令和5年3月1日(水)~3月31日(金)(必着)

〈助成対象〉民間社会福祉施設整備費

〈大阪府共同募金会ホームページ〉

<http://www.akaihane-osaka.or.jp>

赤い羽根おおさか

検索

〈問合せ〉大阪府共同募金会事務局まで TEL 06-6762-8717

立ちどまらない保険。

MS&AD 三井住友海上

三井住友海上の安心

GK

クルマの保険 火災の保険 がんの保険

www.ms-ins.com